

## 英語教育のありかた

小学校から英語教育を始めるという。しかし現在のような教育内容（カリキュラム）を続けている限り、「時間をかけた割には、英語で自己表現が出来ない、成果の乏しい状態」が続くのでしょうか。つまり、現在の英語教育は、中高と大学入試に備えた準備で、全員が一律に極めて高度な内容に取り組んでいます。勿論、受け入れる大学側にも、入学試験の内容、レベルに差があり、比較的易しい入試内容の大学もあることは事実です。でも、受ける受験生、受け入れる大学がもっと役に立つ英語教育を始めからしたら、教育の成果が大きく変わるのではないのでしょうか。もう一つ、テストの方法も改良点です。点数の多い人が優秀合格するのではなく、語学の試験ですから、一定の資格レベル以上の人合格とする制度にしたなら、全体のレベルが上がり、受験生の負担もへり、多くの学生、大学側に良い成果をもたらすのではないのでしょうか。ここで、問題提起したいのは：

- A. 英語をコミュニケーションの手段として習得したい人、そういう人材を教育したい大学には、実践的な教育法と、競争試験ではない資格試験制度の導入を。
- B 英語を学問としても高度に理解、習得したい人、そういう人材を教育したい大学には、現在の教育法の線で、更に創意工夫を（英語でのデイベイト練習の導入など）。

それには、A では、高1レベルの文章読解力、単語数（3,000程度、又は教育漢字のように覚えるべき英単語を限定してしまうのも一案）を目標にし、基本となる英文法、英語独特の表現等を短文形式で理解暗記させる（200～300程度）。8割出来た人を合格とする。高3を待たずとも、高1、高2でも合格とする。大学の社会科学系、人文科学系でも、この線の延長で大学英語教育を実践的なものにする。自然科学系も、この線で学生の語学負担を軽くし専門性を重視し、英文学者が英語を教えるのではなく、理工学工学の専門家が英語を教えるようにする。英語教育を英語の専門家（英文学者）から、実業専門家に代える必要があろう。

問題点：印度人やオーストラリア人の英語発音、東南アジア人の英文法、中東の人々の英会話、みんな世界で使われている英語です。10の国の人々が英語を話したり書いたりすれば、10の英語があると思います。それらを理解し、自己主張できる英語を身に着けるほうが、著名作家の作品や、レベルの高い時事英語を理解するより大切な時代になってきていると思います。